

大草谷津田いきものの里 自然観察会

クモの不思議

山口由富子（市原市）

日 時：2011年8月7日（日）10時30分～12時00分 天候：晴れ

参加者：20名（大人12名 子ども8名）

担当指導員：和仁道大・山口由富子

この日の観察会に、初めて参加するという人たちが、3組ほど。まだまだ広がりをみせているんだなという手ごたえに、にこやかな和仁さんが、毎度の当地の成り立ちと諸注意を伝えた。加えて、女子サッカーの“なでしこジャパン”が世界優勝を飾ったことから、入り口広場の脇に保護されて咲く、カワラナデシコの花も紹介。

スタートは、入り口広場の住宅地よりに大きな垂直円網を張るコガネグモから。ここで棒糸、横糸、縦横の違いを、実際に手を触れて確認した。いつも下向きに巣の中央にスタンバイするワケも説明した。次いで、未来のファーブル育成のためのバッタの生贋を、その巣に奉納し、素早く糸を絡める様子に参加者から「オオッ」という感動（？）の声を聞いた。

たまたま、その巣の端のほうに仁丹玉のように光るシロカネイソウロウグモを発見。このクモは、他人（この場合はコガネクモ）の巣に居候して、網に引っ掛けた獲物を頂戴するというシロモノ。クモの社会も人間同様、ズルイというか要領よく生きるもののがいるということを学ぶ。そして彼らの特徴は逃げ足が速いということ。何か、妙に納得される生き物と覚えた。

林に入ると、秋の女王といわれるジョロウグモが幼体で出現。女王といわれるだけに、幼くても3面張りの網には威厳があり、エサもそれなりにかかっていた。足もと近くには、揺れるように動くザトウムシが。これも観察カップに入れ、ルーペを使ってクモとの違いを観察した。

湧水脇の田んぼやショウブの群生地には、白い隠れ帯をもつナガコガネグモを多数発見。そのオスとメスをとらえ、雌雄の違い（特徴）を確認した。また、音叉を振動させ巣に触ると、クモはエサかと飛びついで糸を絡める。このことによりクモは、視力よりも振動でエサの存在を確認するようだ。「じゃ、なんで目が八つもあるの？」「見えないから、いっぱいあるのよ」とは、ある親子の会話。これは、夏休みのいい研究テーマになるのではと、話しかけようとしたが、走り去ってしまい…。

途中で、ベッコウバチの一種（オオモンクロベッコウ？）がコアシダカグモを巣に運ぶところに遭遇。子どものエサにするためだが、殺すと腐敗が始まるので、麻酔をかけた状態のままで、常に新鮮なエサを与えるように工夫しているのだそうだ。

斜面林には、緑色の松葉のようなオナガグモや、やはり同じ緑色のワキグロサツマノミダマシなどが、観察された。その他には、クサグモ、ウズグモ、ゴミグモ、ワカバグモ、シラヒゲハエトリ、ジグモ、オオシロカネグモ、コモリグモなどを、観察した。

参加者のなかに、「クモは、きらい」という女性がいたが、最後には「なんだか、可愛くなってきたので、これからは子どもと一緒に、積極的に見てみます」と、こっそり私に話してくれた。

これこそ、この観察会のネライ！と、猛暑も吹っ飛ぶ思いがした。

